吹田市立博物館
SUITA CITY MUSEUM

博物館だより

NO.82
Suihaku
2020.7

長山孔寅筆　『木蓮に孔雀図』

上島鳳山筆　『猪図』

夏がめぐってきました。しかし、コロナ禍のため、いつもの夏ではありません。吹田の自然と環境をテーマに市民実行委員会がつくりあげる夏季展示はやむなく中止となりました。ダンゴムシレースなどのイベントも実施できません。代わりに急きょ「吹田の名品展―西尾家・中西家旧蔵品」という美術展示を企画しました。同時に、ミニ展示「新型コロナと生きる社会―私たちは何を託されたのか」をロビーで開催します。いずれも会期はほんらいの夏季展示に合わせて７月18日（土）から８月23日（日）までとなっています。

また、本誌でも通常の夏季展示の特集にかえて二つのトピックを選びました。ひとつは博学連携の「むかしのくらしと学校」展をふりかえるものです。もうひとつは、目に見えない病原体と闘った歴史を回顧するものです。とりあげたのは疱瘡（天然痘）ですが、コロナウイルスにも通じるものがあるはずです。

明るい話題としては、４月１日に採用された考古担当の竹原千佳誉学芸員のデビュー原稿を掲載していることです。

夏の暑さにもコロナウイルスにも負けない紙面をお楽しみください。

（特別館長　中牧弘允）

博学連携　～特別企画「むかしのくらしと学校」展のこれまでとこれから

特別企画「むかしのくらしと学校」展は、学校教育との連携事業（博学連携）の一環として、平成11（1999）年度から開始されました。小学３年生の社会科単元「くらしのうつりかわり」の学習と連動して、子どもたちの祖父母や曾祖父母の幼少期から現在に至る生活のうつりかわりを紹介する展示です。学校からの要望を受け、平成13（2001）年度より展示資料を「観る」という要素に限らず、子どもたち自らが「さわる・体験する」コーナーを導入した展示となりました。また、同年度より子どもたちへ直接解説したり、子どもたちを指導するボランティアの制度を導入しました。現在までの20年を超える取組みの結果、いま特別企画には、【むかしのくらしの道具や学校教材等】を見学・体験するコーナーと【あかりのうつりかわり】を学ぶコーナー、【米づくりが始まったころとむかしの米づくり】を体験するコーナーの３つの活動の場があります。これらの３つの体験活動に１日あたり10名程度の市民ボランティアの皆さんに関わっていただいています。

さらに、この特別企画は、吹田市教育委員会や吹田市小学校教育研究会社会科部と緊密な連携を進め、団体見学に係る学校説明会・見学抽選会を毎年実施しています。博学連携の事業として、博物館に学校が足を運ぶ「団体見学」と、博物館が学校へ足を運び実施する「出前授業」とがあります。

出前授業は、特別企画「むかしのくらしと学校」展の一つの「あかりのうつりかわり」を学ぶコーナーと同じプログラムを学校で行うものです。学芸員・学校連携担当博物館職員（学校OB）・ボランティアの授業者の３者で出前授業に向かいます。吹田市内には36の小学校がありますが、博物館来館が28校、出前授業７校（平成30（2018）年度の実績）というように、ほぼ全小学校の第３学年の3000名を超える子どもたちと毎年ふれ合うことができており、職員をはじめ多くの市民ボランティアの皆さん共々喜んでいるところです（残念ながら、令和元（2019）年度は新型コロナウィルスの感染拡大防止のため途中中止となり、来館19校、出前７校でした）。

出前授業「あかりのうつりかわり」

団体見学　朝のあいさつ

特別企画「むかしのくらしと学校」展に係る「ボランティアの会」は、約30名のボランティアの皆さんの自主的で献身的な活動により支えられています。そのメンバーは市報等での公募に対して応募された方と学芸員体験講座受講者とで構成されます。「ボランティアの会」の活動として、毎月１回のボランティア会議と年１回の研修（大阪府内外の博物館見学やボランティア同士の交流会等）を実施しています。

ボランティアの皆さんの大きな喜びは、吹田市の小学３年生・子どもたちとのふれ合いそのものです。【むかしのくらしの道具や学校教材等】を見学・体験するコーナーでは、豊富な展示資料について、３年生の子どもたちに分かりやすく説明をしたり、着物体験のお手伝いをします。

ボランティアによる解説

また、下駄や草履での井戸水運び・赤ちゃん人形のおんぶなどを丁寧に教えます。そのほかにも機織（さをり織り）体験の見守りなど、普段の生活ではなかなか経験できない昔にタイムスリップしたかのような活動のお手伝いをしていただいています。

さをり織り体験

【あかりのうつりかわり】を学ぶコーナーは、毎年教員より「わかりやすく楽しい組み立てで、わくわくしながら集中し自分の頭で考え、学び多い授業だ。“社会科エンターテイメント”授業だ」といった称賛の声をたくさんいただく名物コーナーです。

授業「あかりのうつりかわり」

また、【米づくりが始まったころとむかしの米づくり】を体験するコーナーは、機械もない時代の米作りの生活、（ボランティア作製のミニチュア千歯こきでの）脱穀や（今の時代のすり鉢やペットボトルを使った）籾すり・精米体験を実際に本物のイネ（これも吹田市江坂町で作られている稲をボランティアの皆さんが稲刈りをした）を使って体験するお手伝いにボランティアの皆さんがあたっています（ボランティアの感想や思いについては４頁に記します）。

精米の体験

新型コロナウイルス感染症の終息が見通せない今、子どもたちとボランティアとのふれ合い、何よりも子ども自らがさわる・実感する・自分の身体を使って体験することを重視した活動を中心としてきた特別企画「むかしのくらしと学校」展は、今後の取組みの再考を求められています。また、吹田市教育委員会や学校との緊密な連携のもと着実に進められてきた博学連携は、新しく改訂された吹田市小学校社会科副読本（吹田市内の小学３年生が手にして学ぶ教科書です）の内容ともリンクしつつ、新たなステージに向かいます。これまで大切にしてきた「あかりのうつりかわり」の授業や「むかしのくらしと学校」での当館収蔵品の展示鑑賞をベースに、「主体的で、対話的な学び」を構築できる特別企画展でなくてはいけません。これからもボランティアの皆さんとともに、力を合わせ、前進していきたいと思います。子どもたちのキラキラと輝く瞳のために。

（学校連携担当　藤原博史）

特別企画に関わって　～ボランティアの皆さんの声～

子どもたちが時間を忘れて約３時間、わき目も振らず過ごせるというのは凄いことです。それもスポーツや遊びの場ではありません。吹田市立博物館の「むかしのくらしと学校」展では、市内の小学校３年生を対象に体験授業を行ってきました。毎年3500名前後の児童がやってきます。運営をサポートするボランティアは、４月から企画・展示品の作成・修理を始め、翌年の１～３月になると授業も担当します。小学校３年生が相手なので解説はわかりやすい言葉と内容で行いますが、思わぬ質問にも答えられるよう、専門的な知識もしっかり勉強しておかねばなりません。また、むかしの人たちの生活を体験してもらうということで、ケースの中にある物以外は、どの展示品も自由に触れたり使ったりすることができます。最近は、引率の先生方も若い人が増え、先生にとっても「むかしのこと・もの」となり、子どもとともに発見・体験を楽しんでおられるようです。

2000年前のくらしを説明

もう20年以上続くこの企画、準備作業などボランティアもだいぶ慣れて何事も手早くなってきました。少し心配なのは解説を担当する人が固定化しつつあることです。勇気をもって多くの方に担当いただくと、授業日の担当のやりくりに余裕ができて、良い授業につながるのですが・・・。

今年、令和２（2020）年度は新型コロナ蔓延の影響で残念ながら準備も未だできていません。実施できるかも不明ですが、「えっ、もう終わり？おもろかった。」と言う子どもらの声を再び耳にしたいものです。

（ボランティア　田尻駿一郎）

団体見学の朝、ボランティアは博物館での数多くの体験を、有意義に楽しく過ごしてもらいたいとの思いで子どもたちを出迎えます。講座室では、真っ暗闇の中で、飛び散る火花に「ウワ～ッ！」と感嘆の声が響き、質問に正解をする子へ全員で拍手を送り、喜びを分かち合いながら「あかりのうつりかわり」を学びます。

その後、特別展示室に足を踏み入れると、先生方をはじめ皆、赤や紺の着物と、下駄・わら草履の姿に変身し、うれしそうです。車イスの男の子は赤い着物を着て、お友達とちゃぶ台を囲んで楽しくしています。その様子を、先生はカメラに収めておられました。リクライニング車イスの男の子にジェスチャーを交えながら拙い説明をしていると、二人の介助員さんの「あっ！この子、笑ってる」「ほんとや」との会話。声を出して笑う可愛らしい笑顔を見せてもらい、感動しました。みんな深い愛情に包まれて育てられたのが伝わってくるようでした。

また10kgの井戸水の桶を一生懸命に運ぶ女の子に、思わず手を出しそうになりますが、ぐっと堪えて見守ります。運び終えたときの満足げな表情にほっとします。そんな子どもたちの意欲的で明るく生き生きとした姿に、私達ボランティアは元気をもらっています。

新型コロナウィルス感染拡大防止のため、昨年度は開催途中で中止になり、出前授業も含め小学３年生にとっての貴重な体験ができなくなった学校があったこと、子どもに会えなくなったことは、とても残念です。令和２（2020）年度の展示内容の見直しやコロナ感染予防のことなど、今後の大きな課題となりました。

（ボランティア　河野三重子）

自己紹介　新規採用の考古学専門学芸員　竹原千佳誉（ちかよ）

〈自己紹介〉

新しく吹田市立博物館の考古学専門学芸員として着任した竹原千佳誉です。生まれ育ちは高槻市です。昨年度まで茨木市立文化財資料館に文化財調査担当員として３年間学芸業務に携わっていました。高槻、茨木、吹田をまたにかけて活躍したいと思っている次第です。趣味はポスターなどのデザインを考えること。アルフォンス・ミュシャが大好きです。

〈専門分野〉

神戸女子大学で日本考古学をまなび、同大学院に進学後はなが～く在籍して研究を重ねながら、発掘調査や資料整理の修業を積んできました。

研究テーマは、古墳時代の形象埴輪から古墳時代像をあきらかにすることです。これまでは形象埴輪のなかでも「船形埴輪」を中心に、その政治的な意味や階層性について研究をしてきました。船形埴輪には、古墳の主の魂をあの世へ運ぶ乗り物である、とか、海を渡り対外的な活動に従事した人々の古墳にたてられた、などの説があります。しかし、その製作のピークは、政治的に対外交渉が活発になる５世紀前半であるため、船形埴輪は対外活動に関わるものだ、というような見解で、今後は「渡海」「渡来」についてさらに視野を広げていきたいと思っています。

渡来の研究という点では、吹田市には吹田32号窯をはじめとした、須恵器の一大生産地があり、注目しています。須恵器生産は朝鮮半島の技術が伝わり根付いたことがわかる歴史的な出来事で、古墳時代の海を越えた人々の往来をうかがい知ることができます。また、古代には三島郡と豊島郡の境界に位置していたという、吹田の歴史的環境にも注目して研究を重ね、魅力を発信していけたらと思います。

〈博物館学芸員として〉

子どもの頃、博物館に連れていってもらった時に感じたワクワク感は、とても貴重な体験となっていて、今でもよく覚えています。

大学で学芸員資格を取得するために学ぶ中で、展示をとおして学ぶことの楽しさや、専門的な内容や最新の研究の面白さを来館者と分かち合えるということに魅力を感じ、学芸員になりたいと強く思うようになりました。

とても狭き門である学芸員に就くことができた今、新たに取り組みたいことは「親子で楽しめる展示解説を充実させる」ということです。自身の経験からも、「小さなころから博物館に慣れ親しんでもらう」ことは、地域に根差した博物館としてあり続けるためにも必要な、博物館のファンを育てるということに繋がっていると思っています。

親子で気楽に訪れ、楽しんでもらえるような空間づくり、色彩効果を取り入れながらの印象に残るような展示を目指し、「親しみやすい学芸員のお姉さん（？！）」として市民の皆さんと一緒に博物館の仕事に取り組んでいきたいと思います。　（当館学芸員　竹原千佳誉）

近世の疫病とのつきあい方　－疱瘡を例に－

今年は年明けから新型コロナウイルス感染症が世界を襲い、全世界で医療、経済の危機的状況となりました。４月７日には緊急事態宣言が出され、外出規制をはじめ、さまざまな店舗や施設が営業自粛となり、労働・教育に至るまで社会生活に大きな混乱が生じました。５月25日には緊急事態宣言が解除され、徐々に経済活動が再開されてきていますが、引き続き３密を避け、マスクの着用、手洗いを奨励するなど新しい生活様式の実践により日常生活に大きな変化がもたらされています。さらに第２波、第３波の流行がいつやってくるのか予想がつかず、ワクチン、治療薬が開発、普及しても、コロナウイルスの完全な排除はむずかしいのではないかともいわれています。ウイルスとの長期の闘い、上手なつきあい、ある程度の共存を覚悟しなければならない状況です。

長い歴史の中で日本人はさまざまな疫病と闘いを繰り広げてきましたが、江戸時代まで日本人に最もなじみがあった疫病は疱瘡（天然痘）でした。病をどう感じ、認識し、対処するかは地域により多様性があり、歴史的にも変化します。江戸時代の人々と疱瘡との関係について、西欧がペストに対して戦闘的、非寛容的な考え方を示すのに対し、日本の疱瘡に対する観念は融和的、寛容的であり、疫病に馴れ親しんでいたといわれます。こうした江戸時代の人々の疱瘡への対応を知ることは病との上手なつきあい方を考えるヒントになるかもしれません。

疱瘡は江戸時代の死因のおそらく第一位を占めていただろうといわれ、上下貴賤を問わず最も日常的に苦しめられた病でした。医師への診断と投薬は庶民層にもある程度普及していましたが、明確な治療法が確立していなかった江戸時代においては、この病は疱瘡神がもたらすものと考えられ、疱瘡に関する信仰、俗信は多彩で全国に及んでいました。疱瘡神信仰の特徴の一つに、この神が赤色を好んだり、あるいは嫌うということがあり、そのため、疱瘡神を祀る神棚には赤飯を供え、赤い御幣を立て、病人の衣類、調度に至るまで、周囲を全て赤づくしにすることが行われました。（写真１）

写真1　疱瘡を患う子供と見舞客・疱瘡神祭祀『小児必用養育草』（武田科学振興財団　杏雨書屋所蔵）より

疱瘡への感染は人との接触が前提であるため、人口が密集する都市と人の交流があまりない地方では流行の事情が異なり、地方では流行頻度が低く、人口が密集する都市では、連年絶えず流行を繰り返し、蔓延の状態となりました。現在の感染者が比較的都市に集中しているのと同じ状況がすでに江戸時代に起こっていたことがわかります。また、この病は免疫性が高く、一度感染すると終生免疫を保持し、二度感染することはまずないため、都市のように絶えず蔓延の状況下では新たに罹患し、命の危険にさらされるのは免疫のない子供だけとなり、子供の病というイメージが生じました。

子供にとっては、生後初めて死をもたらす病を体験することであり、病からの回復は、死と再生を体験する一生の区切り目である第二の誕生儀礼というべき祭儀となり、通過儀礼の色彩をもつことになりました。無事儀礼が済むよう、家族、近隣の者は、疱瘡神を迎え、たくみにもてなし、つつがなく、速やかに、機嫌よく神を送り出すよう祭祀に努め、痘児への見舞い、もてなし、酒湯（疱瘡の症状に回復の兆しがみえて

くると、疱瘡仕上げの祝事として米のとぎ汁に酒を加えて沸騰させ、赤い手ぬぐいに浸し、顔を蒸すようにしたり、笹の枝を浸して頭からふりかける)、全快祝と続く一連の行事は、まさに家族、近隣の者を含めた祝祭の場であり、家族や共同体を結びつける絆となりました。

そのため、疱瘡は「お役」といわれ、誰も逃れることのできない一生に一度は罹(かか)らなければならない災厄であり、せめて軽く短い期間で済む事を願いました。そして疱瘡を済ませて初めて一人前の人間として認められ、共同体の一員となることができました。

1603年に日本イエズス会宣教師が編纂した日本語＝ポルトガル語辞書である『日葡辞書』には天然痘にかかることを「大人事をする」また、「くじをする」とあり、すでに、中世末には、疱瘡に罹ることが大人の条件であると認識されていたことがわかります。「くじ」は「公事」のことで、したいわけではないが、皆誰もがせざるを得ないことというような意味です。さらに鎌倉・室町時代の史料にも疱瘡にかかっているのは主に子供であるという記載があり、都市部では子供がかかる病になっていた実態が中世まで遡ることができます。

このように江戸期の都市部においては疱瘡は外部からもたらされる恐ろしい病ではなく、常に身近にあり、日常生活に組み込まれた存在となっていました。その一方で、地方では前回の流行から日がたち、免疫を持つ人も希であるため身近な存在ではなく、経験上効果が知られた隔離を強制的に実施し重病人を捨て置くなど、恐ろしい病を排除するだけの方向に対処する例もありました。

近年、病を社会にとって不必要なもの、人間に敵対する存在してはならないもの、あらゆる手段を講じて排除するべき対象としてだけ位置づけてきた近代医学の病気観、健康観に対する見直しが進められてきました。病を絶滅させ、徹底して排除するという論理は、感染者、医療従事者、感染流行地域の人々への偏見にもつながりかねません。病が全くない社会は考えられません。人はあくまでも自然の一部です。正しい知識で正しく恐れることが大切です。

江戸期に通過儀礼的色彩を持つに至った疱瘡へのまなざしをよく伝えているものに赤色の呪術に裏付けられた疱瘡絵（赤絵、紅絵）といわれる赤一色で刷られた疱瘡除けの浮世絵版画があります。江戸後期に流行したこの絵は、枕屏風(まくらびょうぶ)や疱瘡神の棚などに貼られた後、疱瘡が治ると川へ流されました。

この絵に描かれた題材及び絵に歌われた呪歌は以下の４つに分類できます。

①剛弓で知られた平安末期の武将で、流罪となった伊豆大島から八丈島に渡り、疱瘡神を退治したという伝説を持つ鎮西八郎為朝や鍾馗といった病除けの武人、武神を描き、疱瘡神を退治し、病を除去しようとするもの(写真２)。

写真2『疱瘡の赤絵・麻疹の草紙』のうち鍾馗
（武田科学振興財団杏雨書屋所蔵）

②縁起のよい、めでたい高砂の尉(じょう)と姥(うば)、鶴亀、兎の餅つき、独楽、宝船、打出小槌、鯛車、春駒、羽子板、万歳、七福神などを描き、特に新春、正月を想起させ、吉祥的性格、祝祭性を強調し、呪歌に「祝う」「めでたい」「よろこび」といった表現がみられるもので、現在を疱瘡から身を守る、不幸なことを避けるのに最も適切な時期に変化させようとするもの(写真３)。

③元気よく遊び笑う健康な子供を描き、「威勢よく」「元気よく」「機嫌よく」「よき」などのことばが読み込まれ、金太郎や病からすぐに起き上がるように達磨を描くなど子供が元気で健康な状態に回復することを表現しているもの(写真４)。

写真3『疱瘡の赤絵・麻疹の草紙』のうち春駒
（武田科学振興財団杏雨書屋所蔵）

写真4『疱瘡の赤絵・麻疹の草紙』のうち子供と張子犬
（武田科学振興財団杏雨書屋所蔵）

④呪歌の中に「軽く」「かるかる」「かろかろ」軽業、軽焼、軽石など「軽い」という表現を随所に用いて疱瘡の軽いことを願うもの（写真５）。

疱瘡絵本として知られる、為永春水の『疱瘡安全子供軽業』、十返舎一九の『疱瘡請合軽口話』等は②③④の祝祭性、子供の健康、遊戯、「軽さ」をすべて兼ね備えたものになります。

吹田市立博物館だより　第82号　令和2年（2020年）7月8日発行
編集・発行／吹田市立博物館
〒564-0001　吹田市岸部北4丁目10番1号
TEL 06（6338）5500　FAX 06（6338）9886
ホームページ http://www2.suita.ed.jp/hak/

この冊子は2,500部作成し、1部あたりの単価は26円です。

写真5『疱瘡の赤絵・麻疹の草紙』のうち軽業の子供
（武田科学振興財団杏雨書屋所蔵）

一般的に疱瘡絵といえば①の疱瘡神が、武神、武人に追い払われ、平伏す姿を描いたものは少なく、多数を占めるのは②③④の感染を避けることができない子供のため、元気よく遊び、笑う子供の姿を描き、縁起よく祝祭性を強調して疱瘡が軽いことを願う呪法を駆使したものです。そこには通過儀礼が無事滞りなく済むことを願った、疱瘡に対する病観がうかがえます。

江戸時代の都市に暮らす人々は疱瘡を恐ろしい病として忌避しながらも、病を全く拒否するのではなく、病全体を大きく包み込み、自らの生活の中に受け入れ、病とうまくつきあいながらともに生きる共生をはかっていた姿がみてとれます。人との関わりの中で疫病もひとつの文化に位置づけられていったのです。

（参考文献）

川部裕幸「伝染病の都市民俗－江戸の「疱瘡文化」予察－」現代伝承論研究会編『現代都市伝承論－民俗の再発見－』2005年

藤井裕之「疱瘡、麻疹にみる病観－疱瘡絵とはしか絵の比較－」『近畿民俗』№ 142.143合併号 1995年

（当館学芸員　藤井裕之）

展覧会予定

令和２年７月18日（土）～８月23日（日）
企画展『吹田の名品展－西尾家・中西家旧蔵品』
ミニ展示『新型コロナと生きる社会
－私たちは何を託されたか』